

井伏鱒二全集

第五卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第五卷

昭和四十年三月二十五日發行

著 者 井 伏 鱒 二

發 行 者 古 田 晁

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京四七六五一(代表)

振替東京四一二三

本文用紙 三菱製紙株式會社
クロス 東洋クロス株式會社
印刷 株式會社 精興社
牧製本印刷株式會社

© 1965 M. Ibuse Printed in Japan

目 次

かきつばた	三
お島の存念書	二三
犠 牲	二八
吉凶うらなひ	三七
ワサビ盗人	一五
乗合自動車	一六
藥師堂前	一八
追懷の記	一九
晩春の旅	二二
かるさん屋敷	三六

安土セミナリオ	四九
---------	----

解題	四七
----	----

井伏鱒二全集

第五卷

かきつばた

廣島の町が爆撃されて間もないころ、私は福山市近郊の知人のうちでカキツバタの花の狂ひ咲きを見た。たつた一輪、紫色に咲いてゐた。ちやうど停戦命令が出た直後、八月中旬すぎのことであつた。普通、この季節には、もうカキツバタは鮮緑色の長めな坊主頭の子房を結んでゐる。それが遅まきの狂ひ咲きで、ほかのカキツバタが群生してゐる場所から少し離れた位置に、ぼつりと水面に出た劍狀の葉から綠莖を抽いて、陳まがりの花をつけてゐた。はじめのうち、私は知人のうちの離れの二階からそれを見て、池の水面にお菓子の包み紙か何か浮かんでゐるのだと思つてゐた。

福山市から廣島市まで約四十里の距離である。廣島が爆撃された當日のお晝ころ、私は福山の町に出かけて行き、この町もこれが見をさめだらうといふ感慨で街を歩きまはつてゐた。そこかしこの店で、軒下に古ぼけた家財道具を持ち出して、大安賣りの札を出してゐた。箆、鏡臺、ピンポン臺、机、食器、鹿の角、熊の毛皮、そのほか種々雑多な古物が持ち出されてゐた。古疊を何枚も格子窓の外に立てかけて「このタタ

ミ賣ります、一枚三十錢」といふ正札をつけてゐるのがあつた。二た抱へもある伊萬里焼の植木鉢に、びつしり植ゑてある背の高い棕櫚竹しゅろちくが「コノ棕櫚竹、鉢グルミノ賣價、金八十錢也」の貼紙で賣りに出されてゐた。小型の古びたオルガンが五圓であつた。薄桃色の花をつけた含羞草おじぎさうの植木鉢が十錢、物干竿が三本で十五錢、日本時代史全十四巻が十四圓……。

「おい、まっさん。どうしたのか、おい素通りか。」

と、私に呼びかける者がゐた。

見ると、安原薬局の當主が白い縮帷子ちぢみかたびらのシャツをきて、手に金槌を持つて店の入口に立つてゐた。この人は私と同じ村の出身で、もう二十何年前からこの町に出て藥品一式の店を開いてゐる。私の子供のときの遊び仲間の一人である。「まっさん」といふのは私の幼少年時代の呼び名である。

私は安原薬局の主人と立ち話をした。

「今日は、この町に最後の見をさめをしに來た」と私は云つた。「敵機から撒いたビラに、この町を爆撃することゝも忘れてゐないと、書いてあつたさうぢやないか。いつ、お宅は疎開するんかね。」

「強制疎開の命令が出たから、いま片づけてをるところだ。しかしなあ、まっさん、見てくれ。この通りだ、一朝一夕に片づくもんかね。」

薬局主人は試しに板を一枚、金槌で土間の窓へ釘づけにして見せてくれた。強制疎開命令によると、爆風を防ぐためにこの通りにして、窓や戸口を板で塞ぐことになつてゐるさうであつた。

「愚痴を云ふわけぢやないが、どこから片づけてよいか、見當がつかん。さつぱり仕事が手につかん。」

藥局主人は愚痴をこぼした。人夫を頼まうにも、みんな、てんでんに引越騒ぎで来てくれる人がない。金物屋に行つても釘は品切れだと云つてゐる。だから、座床をとめてある釘を抜いて間にあはしてゐるさうであつた。

店の柱時計が十二時を打つと、

「おい、まッさん。帽子に釣鉤がついてゐるよ。」

藥局主人はさう云つて、私の帽子から釣鉤を取つてくれた。釣に行つたとき差したままにして忘れてゐた鉤である。

私は藥局主人に「早く疎開した方がいいぞ。では、失敬」と云つて、その足で驛前の小林旅館に寄つた。この宿屋と私は三十年來の馴染である。學生のころから田舎に歸省するたびに、この宿屋を足だまりにして私の定宿にきめてゐた。間口は狭いが奥が深い造りになつて、中庭の梅の古木の根元に伊部焼の水甕が据ゑてあつた。この水甕は、私の學生のころからその場所に置き放しにされてゐた。高さ四尺の朱色に近い、ねつとりとした土肌の水甕で、陶印は篋で無造作に彫つた縦横三本づつの交叉線であつた。あるとき私はおかみさんに、この水甕を譲つてくれないかと頼んだが、水道の水がきたとき入用かもしれないから譲れないと云つて斷わられた。妙なもので、斷わられてみると自分が非常にそれを欲しがつてゐることがわかつた。その次に行つたとき、また譲つてくれと云ふと、先代のころからあそこに置いてあるのだから賣らないと斷わられた。その次に行つたとき、また頼むと、あの水甕は雨の降る日に大變きれいに見えるから賣らないと云つて斷わられた。また頼んでみたが駄目であつた。しかし小林旅館も強制疎開で立ち退くとすれば、もし

かしたら手放さないでもないだらうといふ見込があつた。

やはり甕は中庭の梅の木のそばにあつた。

「あの水甕、僕の村に疎開させないか。」私は、おかみさんに云つた。「僕が保管しておいてあげようか。今日は、荷車を頼むついであるからね、ちやうど幸ひだ。」

「水甕なんか、疎開させなくつても結構ですよ」と、おかみさんが云つた。「空襲なんか、あるものですか。うちぢやあ、ただ疎開命令が出たから、人間だけ疎開するつもりです。」

おかみさんは客膳の支度で忙しさうであつた。二階の部屋にも離れにも、何組もの客が相部屋で食事を待つてゐる様子である。下りの汽車が、次の驛あたりから先で不通になつたので、乗客が全部この福山驛で降ろされたさうである。「不通の理由が、驛員にもわからんです」と小林旅館の主人が云つた。國民服をきたお客が二人、土間の上り框に腰をかけて、最近の國鐵職員の怠慢が甚しいことについて不平を鳴らしてゐた。その一人が「理由を發表しろと驛員に云つても、わからんと云ふだけだ。乗客を不安に陥らすつもりかと、俺は驛員に反問してやつた」と云つた。「この様子ぢやあ、國鐵の廢類に對して、みんなぶうぶう云ふのが當り前だ」と他の一人が云つた。

私は小林旅館を出て、すぐ近くの平井齒科醫院に寄つた。ここの院長は中學時代に私と同級であつた。控室に數人の患者が待つてゐたが、院長はテーブルに頰杖をついて來診患者の一人と話してゐた。

「やあ、まっさん」と院長は、私の方を振向いて云つた。「たうとう強制疎開ぢや。どうも仕事が手につかんのぢや。いつたい、この福山の町は、どうなるんか。」

「治療臺なんか疎開させないのか。敵機が撒いて行つたビラに、いまに空襲すると書いてあつたさうぢやないか。」

「それだよ、問題は。しかし、考へるだけでも、もうぐつたりした。どうもいかん、逢魔^{あま}が時が押し寄せたやうだ。」

治療室にある三臺の治療臺に、三臺とも患者が腰をかけてゐた。助手が二人、無言のまま治療してゐたが、平井院長はそれに尻を向けてテーブルに頬杖をついてゐた。つい數日前、この院長の一人息子が少年航空兵に志願して大陸に渡る途中、輸送船が沈没して亡くなつたので、尙さらがつかりしてゐたやうである。

私は福山の町から歸りに川沿ひの道を歩いて來た。鐵橋のたもとのとこに、土囊で圍ひをして高射砲が据ゑつけてあつた。兵隊は一人もゐなかつた。砲身は西に向いてゐた。(後でわかつたが、これは本當の鐵砲ではなくて鐵砲の型をした案山子であつたさうだ。)私は鐵橋の下の草原に降りて、西の方の空を氣にしながら辨當を食べた。——兵隊が一人も番をしてゐない高射砲が西の空をねらつてゐる。いまにも西の空から敵機が現はれさうな不安があつた。もし私が、その日の午前中に廣島が爆撃を受けたと知つてゐたら、同時にまた原子爆彈の性能を知つてゐたら、西の空を別の意味で望見した筈である。福山から廣島まで四十里だが、西の方に山がなければ原子雲といふのが見えたかもわからない。廣島から三十里離れた三原の町の人、青天に突如として湧き出た不思議な恰好の雲を見たさうである。江田島の士官學校では校舎の北側の窓硝子が破れ、海岸の砂濱で體操してゐた學生たちが爆撃と同時にひっくり返つたさうである。

私が廣島の空襲を知つたのは、事後三十時間か四十時間たつてからである。原子爆彈の被害を受けた怪我

人の一人が先づ隣村に逃げ歸つて、奇怪な爆弾で広島市が一瞬の間に無くなつたと云つた。その噂が私たちの村に傳はつたのである。この怪我人は小林哲男といふ名前で、もと私たちの村の小學校長をしてゐたが、數年前に榮轉して広島市の小學校長を勤めてゐた。私はこの人を知つてゐる。小學校のとき私の一級上のおとなしい子供であつた。私の羽織の紐が下駄箱の蝶つがひに引つかかつて、それをはづすのに困つてゐるのを小林哲男が見て造作なくはづしてくれた。私はそれを覚えてゐる。噂にきくと、この人は広島が爆撃された日に學校の職員室で訓辭をした。それが終つたとき、空襲警報が出たので机の下に退避した。約一分間で警報解除のサイレンが鳴つた。小林哲男は「暑い、暑い」と云つて上着をぬぎ、窓のところに行つてシャツをぬいだ。それから肌着のランニング・シャツを半分までぬいだとき、その布地を透かして射しこむ光が閃いた。地響きのやうな「ざあッ……」といふ音が湧き起つた。いはゆる祕密兵器で攻撃して來てゐるのだと思つたので、上着をかぶつて外に逃げ出した。裏門を出ると、その塀の外にあつた空車のトラックに這ひあがつた。裏門の筋向うの家から相當年配の男が駈け出して來て、そのトラックの運轉臺に乗つた。トラックは發車した。行く先はわからないが小林は黙つて乗つてゐた。間もなく氣が遠くなつて、それから漸く氣がついたときには、何とかといふ町まで運ばれてゐた。體ぢゆうに得體の知れない激痛を覺えた。死ぬなら郷里のお袋と妻子のところで死にたいと思つたので、その町からまた便乗のトラックで福山までたどりつき、福山から厚生車で自分の生家に歸つて來た。血まみれになつてゐた。さつそく、その村の田和さんといふ醫者に見てもらつたが、田和さんは治療に困つてゐるといふ噂であつた。

広島島の焼けた翌々日、福山の町が空襲を受けた。私は裏山の尾根に出て、「鬼の唐臼」といふ大岩のそば

から、三里あまり遠方の福山の町の燃える明るみを見た。町は山のかげに隠されてゐて火の手は見えないが、山の端が全體に明るくなつて、一箇所、火柱の立ちのぼつてゐるのが見えた。お城の天主閣が燃えてゐるのだと私は推定した。山の切れ目の峠のあたりに二箇所、人家の集團で火事を起してゐるのが見え、その手前の廣い耕地に誘蛾燈を灯したやうに小さな光の點々がつづいてゐた。

「あの漁火いさびのやうなのは、あれは何ぢやらう」といふ聲がきこえた。近所の人たちも福山が燃えるのを見に山の上に来てゐたが、みんな黙りこんでゐるので、どの人影が誰だか知れなかつた。

「おい、あの漁船の灯のやうなのは、何ぢやらう」と繰返して云ふ聲がした。

誰もそれに答へなかつた。よほど暫くたつてから、崖の下の方で「おい、その山の上に、西組のものがをるのかあ」と呼ぶ聲がした。誰も返辭をしなかつた。また崖の下から、

「おい、西組の自衛團員は、みんな集合ぢやあ。罹災者の救護に、福山へ出發ぢやあ。」

と云ふ聲がきこえた。すると、根上り松の根元にうづくまつてゐた人が、黙つて立つて山を駆け降りて行つた。みんな敵前に身をかくしてゐるやうに、息を殺して向うの山の端の明るみに目をこらしてゐるやうであつた。敵機のとぼしてゐる青い光の一點が、ときどき夜空に見えたり隠れたりした。私は高射砲が空に向けられてゐるのを心に想像した。それでも彈丸の撃ち出される音は一度もきかなかつた。

誘蛾燈のやうな光の點々が消え、山の端の火柱がをさまつてから私は山を降りて來た。空襲の全貌は知れないが、何しろ凄みを利かされた空襲であつた。すくなくも二百機ぐらゐは攻めて來たのだらうと思つてゐたところ、翌朝になつて噂にきくと、六十機來襲したといふことであつた。福山の町は七分通りまで焼けて、

お城の天主閣も三階の窓から焼夷弾が這入つて焼け落ちたさうである。

今度はどの町がやられるだらうと私たちは話し合つた。廣島もやられ、その前に岡山がやられ、瀬戸内海を隔てた今治の町もやられた。岡山は焼夷弾を浴びせられ、今治は爆弾を落されたものと思はれる。私はラヂオの放送をききながら、今治に爆弾の落ちる地響きを感じた。岡山が空襲されるときには響きが傳はらなかつた。今治は瀬戸内海を距てて何十里もの遠方だが、爆弾の落ちる地響きが一發づつよくわかつた。尼ヶ崎の空襲のときにも地響きがした。私の疎開してゐた家は高い石崖の上にあつたので、地響きが特別敏感に傳はつた。それが刻々に傳へられるラヂオの實況説明と相俟つて、不安の氣持を尙さら大きく掻き立てた。福山が空襲されてから一週間目に、ラヂオ放送で敗戦を知らされた。私は胃を悪くして、隣村の田和さんに診察を受けに行つた。田和さんは往診に忙殺され、患家からまだ歸らないうちに他の患家から迎へが來て、しげしげと自宅と患家を往復した。この村の青年たちが義勇兵といふ資格を與へられ、廣島へ家屋疎開の手傳に出張してゐたので、それがみんな原子爆弾の被害を受けて、生き残つた者も手負となつて歸つて來た。無疵の者も得體の知れぬ苦痛を訴へる。

「目も當てられぬ苦しみだ。どこが痛いといふのでもなく、ただ無性に苦しがる。治療法のない新發生の病氣だね。恢復の期待が持てないのだから、醫術はこの病氣に對して、でくの棒だね。小林哲男さんも、血だらけになつて歸つて來た。しかし、手當の方法がないものだから、慘憺たる苦しみで亡くなつた。——それでも大怪我の身で、よく歸つて來たものだ。」

田和さんはさう云つた。病名もまだ名づけられてゐなかつたので、田和さんは假に「義勇兵の病氣」また

は「不思議な苦しみをする病氣」または「治療法のない病氣」と云つてゐた。この病氣にくらべると、胃病なんかの苦痛は物の數でもないさうである。

隣村の「義勇兵の病氣」の患者たちは、およそ二週間ばかりのうちに、亡くなる者は亡くなつた。生き残つた者は、そのころ地方新聞に發表された療法によつてお灸をすゑた。これが利くのかどうか知れないが、お灸で助かるといふ説を強調する者もゐて、「義勇兵の病氣」で死んだ患者の隣の家の者が、病氣の傳染するのを怖れてお灸をすゑた噂もあつた。

私の村でも、廣島の學校に入學して行つたばかりの學生が亡くなつた。安原藥局の長男も、やはり廣島の高等學校に入學したばかりのところ、即死で亡くなつた。廣島空襲の當日、私が福山の街で安原藥局主人と立ち話をして、ちやうど相手が私の帽子から釣鉤を取つてくれた時刻の少し前に、その人の愛兒が落命したわけである。「おい、まッさん、帽子に釣鉤がついてゐるよ」といふ言葉は、私にとつては別に縁起の悪いものではない。ただ安原藥局主人が、それを思ひ出したとすれば何と思ふか疑問が浮かぶだけである。この藥局主人の育つた家は、私の村の往還からちよつとそれた岡の麓にある。古めかしい大きな構への屋敷である。私は藥局主人がもう疎開して歸つてゐると思つて弔問に出かけたが、開け放した倉の土間に薦包みの荷物こもづつが置いてあるのに誰もゐなかつた。母屋は壁が崩れ落ち、瓦のずれ落ちた廂が傾いてゐた。長らく廢物としてうつちやつておかれた屋敷である。

その翌々日、私はお城の天主閣の焼趾を見るために福山に行つた。歴史や物語に、よく天主閣炎上の話があるが、燃えた趾の光景を述べたものをまだ見ないので實地に見て置くつもりであつた。しかし私の見た天